「総合的な学習の時間」（青葉タイム）における取り組み

足利市立青葉小学校

1　研究主題

基礎基本を身につけ、進んで学び自ら考え表現できる児童の育成

目指す児童像

意欲的に課題解決に取り組み、活動に見通しをもったり、振り返ったりしてよりよく学習しようとする子

2　研究主題及び目指す児童像設定の理由

「総合的な学習の時間」は、地域や学校、子どもたちに応じて、各学校が創意工夫を生かし、これまでの教科の枠を越えた学習ができる時間ということで、新学習指導要領がめざす「生きる力」を育てる重要な役割を担うものである。

本校では、新学習指導要領移行期間から「総合的な学習の時間」の研修を現職教育の中心におき、少しずつではあるが研究に取り組んできた。それは、主に、単元開発や単元構想、学習をどのように展開し広がりをもたせるかというような内容のものであった。つまり、とりあえず取り組んでみようという段階であった。もちろん、この時期は、先進校の研究会に参加したり、講演会や書物による研修などしながら、本校としての「総合的な学習の時間」を創ろうと試行錯誤していた時期でもあった。また、この時期は、学年単位で、苦労しながら「総合的な学習の時間」に取り組んでいた。

平成１５年度からは、これまでの学年を中心とした研究を生かし、さらに学校全体としての研究として充実させていきたいと考えた。そこで、「総合的な学習の時間」のねらいを踏まえ、また、本校の教育目標との関連から、本主題を設定した。

また、これまでの「総合的な学習の時間」の実践を省みると、児童はとても意欲的に学習に取り組むというよい点をもちながら、一方、学習がすすむにつれ、その時、その時の興味の方向へと学習の方向が変わってしまい、課題がなんであったのかを見失ってしまうことがあるという実態が、教師の間でささやかれ始めていた。

そこで、学習の実態を明らかにしてみようと、児童にアンケート調査を行った。すると、やはり学習に対して意欲的に取り組むというよい点が明らかになった。しかし、課題解決のために見通しを立てようとすることはあまりなく、自らの学習を振り返ることも少ないという実態が明らかになった。物事に対して、見通しをもったり、振り返ったりしながら進めることは、自らの生き方を見つめることにも繋がる。つまり、よい点は、さらに伸ばし、足りない力を付けさせることにより、よりよい学習が展開できるであろうと考え、上記のような目指す児童像を設定したのである。

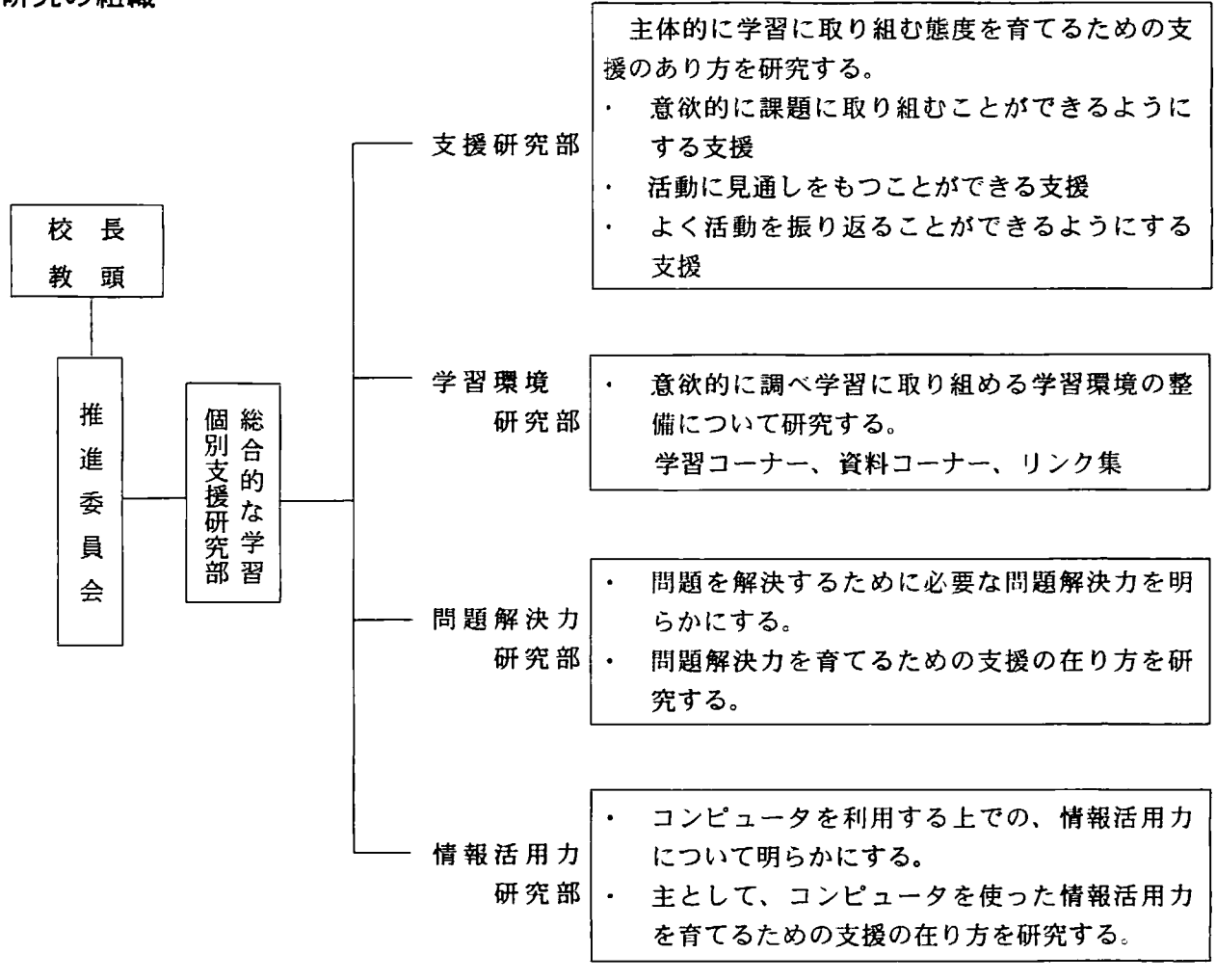
3　目指す児童像の分析

（目　指　す　児　童　像）

意欲的に課題解決に取り組み、活動に見通しをもったり、
振り返ったりして、よりよく学習しようとする子

	中　学　年	高　学　年
意欲的に課題解決に取り組む	興味・関心をもったものの中から自分の課題をみつけ、最後まで取り組もうとする。	自分の課題に向かって、より効果的な方法を工夫しながら問題を解決しようとする。
活動に見通しをもつ	解決の方法や分かったことを伝える方法を考え、自分なりに課題を解決しようとする。	自分で課題を解決したり、探求したりできるような、学習計画を立て課題解決に取り組むことができる。
活動を振り返る	自分の取り組みを確認しながら、自分を見つめようとする。	活動を振り返り、今後の学習の在り方や自分のよりよい在り方を考えることができる。

4　研究の組織



5　研究の内容

〈平成15年度〉

支援研究部

(1)　効果的であった支援

①　意欲的に課題解決に取り組むことができるようにする支援について

・児童の興味や関心が高いもの、児童の思いや願いに適うもの、体験的なものを課題とする。

・自ら課題が設定できるように、ウェビング、具体物の提示、視聴覚教材の活動など、導入を工夫する。

・直接的な体験活動（見学・インタビュー等)、課題別グループ活動、個人による調べ活動など、学習形態を工夫する。

・一人一人がまとめ、発表することを原則として学習を進め、学び方や調べ方等を分かりやすく教えていく。

・資料・具体物を情報コーナーに展示したり、物品等を十分に準備する。

②　活動に見通しをもつことができる支援について

・活動計画表を作成する際に、自ら活動の期限を考えたり、まとめ方や発表の仕方を考え、記入する。

・活動計画表を一人一人作るとともに、いつも活動の進み具合が意識できるように掲示していく。

・イメージマップ（調べていく中で、大切だと思った言葉などを関係づけた図）を作り、紹介したり、掲示したりする。

・思考の流れが残るようなワークシートを作成する。

③　よく活動を振り返ることができるようにする支援について

・中間発表や活動の途中での情報交換を行い、相互評価を行う。

・振り返りカードに振り返りの観点を設けたり、自己評価スケールを設けたりする。

・振り返りのヒントカードを作成する。

(2)　平成16年度に向けて

・「目指す児童像」に迫るための個別支援の在り方について研究し、より一人一人に目を向けた支援を実践すること。

・児童の願いが叶ったり、学習に満足している姿が実現できたりするような支援を実施すること。

〈平成16年度〉

支援研究部

(1)　成果

・２年次は「目指す児童像」に迫るための、個別支援の在り方を取り上げ研究してきた。具体的には児童のつまずきや反応を予め予想して、個別の支援計画を立てた。また、一人一人の児童の作業用紙に教師が目を通し、意欲を継続したりつまずきを解決できるようなコメントを活動毎に、意図的に朱書きしてきた。その結果、見通しをもって活動できる児童が増えてきた。児童はつまずきを解決し、意欲を継続しながら最後のまとめまで、各自の活動計画に沿って学習を進めることができるようになった。

・短い時間に自分の学びを振り返り、的確に文章によって自己評価する力が十分に備わっていない児童

がいる。（特に中学年の発達段階の児童に多い。）そこで、自分の活動をより的確に振り返ることができる支援として、「活動計画の振り返り欄」に「ファイト度」（情意面の自己評価欄）や「考えマーク」（意欲面の自己評価欄）等で、記入できるようにした。また、振り返りの観点やヒントカードの掲示を行った。その結果、以前より、短い時間で十分な活動の振り返りを行うことができるようになった。

(2) 課題

・児童は個々の活動の振り返りを行うが、その振り返りが次の活動の見通しにつながらない場合がある。そこで、今後の課題として、一人一人の児童が見通しをもって活動を継続できるような支援を行うことが大切であると考えられる。しかし、児童が長期の見通しを持って活動することはかなり難しいと考えられるので、活動を振り返る時、次は、「何を」「どのように」「どんな方法で」などを具体的に考えることで、次の活動への見通しをもてるようになるのではないかと考えた。

今後は、児童一人一人が個々の活動の見通しをもって学習に取り組めるような振り返りの在り方を工夫していきたい。

学習環境研究部

(1) 研究の成果

① 2階学習室の整備

まず、子どもたちが総合的な学習をどのような順序で進めていったらよいのか見通しがもてるように、また、振り返りができるように「調べ学習の進め方のマニュアル」を透明ケースに入れて、学習室の廊下側の壁面に掲示した。子どもたちは興味深そうに眺めていたり、調べ方やまとめ方の例を見て参考にする姿が見られた。

次に、調べて分かったことやインタビューしたいことなど、必要に応じて記録するためのワークシートを何種類か用意し、それを使いやすいように設置した。調べ学習を進めていくうちに様々な資料が蓄積していくので、それを保管しやすいようにクリアケースも用意したところ、写真やパンフレットなどの資料を入れて活用していた。分かったことをまとめるときには、まとめる方法に合わせて模造紙や画用紙、マジックなどの筆記用具が必要になる。それらを自由に使用できるよう整備し、興味ややる気が持続するよう配慮した。

また、児童がまとめた作品のうち掲示したり展示したりできるものは、展示ケースや掲示板で紹介したり、保管のためのケースを用意したりして、活用しやすいようになっている。さらに、デジタルカメラに付けた操作マニュアルを拡大コピーし、操作の説明や確認に活用できるよう掲示した。

② 学年の掲示板の設置

子どもたちの興味や関心を喚起したり意欲が持続するように、普段から目にしやすい場所に掲示板を設置した。建物の構造上教室から離れたところになってしまったが、これから学習することや今取り組んでいることに関する資料・作品などを掲示している。

③図書室の整備

子どもたちが自分のテーマに合った資料を沢山の図書資料の中から探すのは、大変困難である。調べたいという意欲が高くても、本が見つけられないためにその意欲を欠いていく子も少なくない。そこで、「青葉タイムコーナー」として、環境・福祉・国際理解・昔たんけんなど、テーマごとに本をまとめて

整理した。3年生などは、本を探すことが大きな障害になってしまうが、福祉に関したことを調べたい子が、どの本で調べれば分かるのかが容易に分かったので、学習がスムーズに進められた。

(2) 課題

・図書室の「青葉タイムコーナー」の本や資料であるが、テーマによっては資料が少ないものがあるので、補充とそれを展示する展示方法の工夫をしたい。

・児童の作品で参考にしてほしい作品の展示や、昔の道具・リサイクル製品・ユニバーサルデザインのものなど、実物の資料の収集と展示も考えたい。

・図書資料ばかりでなく、ビデオなどの映像資料からも調べ学習ができるように図書室や学習室でビデオ視聴ができるように機器などの整備をしたい。

・学習室で調べたりまとめたりの作業がしやすいように、大きな作業机があると便利なので、準備したい。

・人的環境を整える。

問題解決力研究部

(1) 内容

① 課題を解決するために必要な問題解決力を子どもの姿に重ね、具体的な「○○の力」として表現することを考えた。話し合った内容は、授業を実践している各学年の教師にも伝え、その力を育てたり高めたりするための具体的な支援を児童の実態に応じて模索した。

ア 「尋ねる力」を育てるために

・3学年では、総合の学習自体が初めてであることも考慮し、初めて会う人にインタビューするときのことを想定して役割を決め、子ども同士で話す練習をしたり、事務職員に外部関係職員の役になってもらい、実際にインタビューしたり、その様子を見たりする活動を取り入れた。これにより、子どもは、質問をするときの言葉遣い、応答の仕方、メモをとるタイミング、聞き取れなかった内容の聞き返し方などを体験から学び、余裕と自信をもって本番を迎えることができた。また、このことによって子どもが充実感を味わうことができ、次のまとめの段階へと意欲をもって臨むことができた。

・電話、ファックス、手紙などで関係機関に質問したり資料送付の依頼をしたりする場合に、体験不足からくる子どもの不安を少しでも解消できるように、また相手の気持ちを考えた受け応えを心がけることができるように、マニュアルや支援カードを作成した。作成にあたっては、3～6学年が使用できるように、文字の大きさを考えたり、ルビをふるなど、配慮した。さらに、子どもが使用したいときにすぐ使えるように、支援部や学習環境部と連携し、学習室に常置した。

イ 「話し合う力」・「練り合う力」を育てるために

・調べ学習とは、主に本やインターネット、その他の資料や聞き取り等により情報を集めそれをまとめる学習であると捉えることができる。しかし、それをさらに充実させるための活動として、本校では「話し合い」によって情報や意見を交換する、いわゆる「練り合う」という活動に注目している。

その際、子ども一人一人の意見を大切にするとともに、それを生かすための工夫として、貼ったりはがしたりが自由にできる「付箋」を活用した（主に高学年で実践）。これにより、一度自分が言葉にしたものは消えることなく、たくさんの意見を1枚の用紙に集めることができた。似通った意見は

類型化することもできたし、自分が考えもしなかった新しい発想に気付くこともできた。さらに、個人の考えがグループや学年の中で生きていく喜びを味わうことで、話し合いに参加する意欲も高まった。

② 課題を解決するために必要な問題解決力をピックアップし、それをいかにして育てていくかを考え始めたとき、総合の時間だけでなく、毎日の教科指導・支援がどれだけ重要であるかが、大きな論点となった。

ア 課題解決学習に不可欠な「読み取る力」、「話す力」、「聞く力」、「書く力」などは、国語の基本的な学習活動と切り離すことができないのではないかということが見えてきた。そこで、「コミュニケーション能力」に関係する内容を国語の教科書から洗い出してみたところ、学年の発達段階を考慮し系統的に配列されていることを改めて感じた。これにより、日頃の教科指導・支援を振り返ることができ、また、今後、「総合的な力」の育成を意識し、先を見据えた教科指導を心がけることができそうである。

(教師自身の意識改革)

イ 本校の子どもの実態を考えたとき、まとめる活動において、より豊かな表現方法を身に付けてほしいと考えた。目的によって様々な表現方法があること、その各々に特性があること、伝える相手によっても効果的な表現は異なることなどである。しかし、それらを教師が単に言葉で説明し紹介しても子どもは理解することはできない。総合の時間はもちろん、各教科の学習において、教師が意図的に色々な表現方法の良さに気付かせたり、色々な表現方法でまとめる場を設定することが大切であると痛感した。

(2) 課題

① 子ども一人一人が自分なりの課題意識がもてるようにするための支援の工夫

課題を追究する～まとめる段階での子どものつまずきに対して支援していくと、多くの場合、その子の課題意識の浅さ、曖昧さにつまずきの原因があった。課題をもつことはできたが、それが自分にとってどんな意味をもつのか、その課題を解決するためにどんなことを調べるのかということを、子ども一人一人がしっかりともてるような学習を展開できるようにする。

② 問題解決力についてのさらなる分析

「総合」の目標は、主に問題解決力の育成である。その力について、評価をするための基準を定めるようにする。その際、各教科との関わりについてもさらに考慮し、教科学習との連携を図るようにする。

また、発達段階についても考慮し、学年に応じた問題解決力の規準を設定し、その基準についても明らかにする。

情報活用力研究部

(1) 研究の成果

① 児童が自分たちで操作できるようにする為の操作のマニュアル作りに取り組んだ。

・デジタルカメラを３年生以上誰でも使えるように、使い方の簡単な説明文と図入りのラミネート加工したカード（デジタルカメラの使い方）を取り付けた。

・児童が言語を入力する際の入力方法の変更などが誰でもできるように、言語バーの変更の仕方を、マニュアル化して、パソコンの脇に設置した。それにより変更の手順を教師に聞くことがなくなった。

あわせてブラウザの使い方、目的サイトへの進み方（手順）、検索サイトの使い方等のマニュアルも作り検索の際に利用できるようにした。またホームページで使われている漢字の読みが難しい場合のひらがなナビの使い方も同様にマニュアル化し、設置した。

② 調べ学習で使えるリンク集の整備

・既存のリンク集の点検と、４年（環境）、６年（鎌倉）関連サイトの内容を事前に調べ、今回の目的に合ったサイトを選定するとともにリンク集を作成し、児童に活用させる。

③ 授業で使えるビデオソフト等のリストアップと整備

・本校のビデオテープを整備した。足利市視聴覚ライブラリーで出しているフィルムソフト一覧から、授業に活用できそうなビデオテープを多数借用し、視聴した。その中から目的に合ったテープを選び活用した。

(2) 課題

・情報モラルや著作権について学習できる環境の整備と合わせて、情報モラルに関する指導計画の作成を行いたい。

・児童が総合的な学習を進めていく過程で、情報モラルや著作権について理解していることは、必要なことであり大切なことでもある。そこで、総合的な学習の年間指導計画の中に、情報モラルや著作権に関して必要と思われる内容を記入し、児童に指導していくようにする。

・年間指導計画の見直しを図りたい。

各学年で養いたい情報活用の実践力を総合的な学習の年間指導計画に即し、実践を通してより実際的に改善を図っていきたい。

・授業に活用できるリンク集のさらなる充実を図りたい。

総合的な学習の年間指導計画を元に、児童が調べ学習で情報収集を行っていく上で必要であると考えられるものを探し、充実させていく。

6 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

・課題設定の段階で児童がより切実な自分自身の課題としてとらえられるように様々な体験や見学などの活動を取り入れる工夫や学習環境を整える工夫がなされるようになった。

・活動計画表に見通しや振り返りの観点を示すことにより、児童は具体的な見通しをもち内容に踏み込んだ振り返りができるようになり、よりよい学習の成立につながるようになった。このことは、ひいては「生きる力」につながるものと考えられる。

・調べる段階のワークシートは、常に課題を意識できるような視点を入れることにより、課題に沿った調べ学習がなされるようになった。

・児童一人一人の学習をきめ細かく見取ったり、活動計画表の児童の書き込みに教師のアドバイスを記入したりすることで、児童のつまずきに気付き効果的な支援計画をもつことができた。また、そのことによって児童は意欲と自信をもって学習が続けられるようになった。

・学習を進める際の様々な過程で必要となってくるであろう問題解決力を明らかにし、その力をつけるためのヒントカードを教師の手により作成した。そして、活用がなされるようになったことで、調べ

学習やそれをまとめたり発表したりする段階で児童の意欲と自信を高めることができた。また、総合的な学習と他教科との関連が図られた。

・様々な情報の中から、自分にとって必要な、そして有用な情報を取り入れる方法を学び、情報活用能力の基礎を培った。

(2) 今後の課題

・学習の見通しや振り返りをしっかりとして、よりよい学習を成立させるためには児童一人一人へのきめ細かな見取りと支援を継続していくことが肝要である。

・本研究で取り組んだ問題解決力、情報活用力についてさらに詳しく研究し、整理したり系統立て、児童に、より確かな学力をつけるようにしていかなければならない。

・学習環境については、内容の更なる充実と整備、点検を継続していくことが大切である。

・指導要領のねらいや、学校教育目標に迫る「総合的な学習の時間」を実践していくためには、「総合的な学習の時間」の全体計画の見直し、検討を、定期的に行わなければならない。

・この研究で得た成果を「総合的な学習の時間」だけにとどめることなく、本校の教育活動全体に広げていくことができれば今回の研究がより一層意義あるものとなるであろう。

評

これからの変化の激しい社会における教育では、多くの知識を教え込むのでなく、子供たちが自ら学び自ら考えられる力を育てる必要があります。

未来を担う子供たちにとって、自ら課題を見つけ、友達と協力し合って、その解決に意欲的に取り組み根気強く学ぼうとする資質や能力を養っていくことは、今後ますます重要であると考えます。

このような時期に、本研究では、「意欲的に課題解決に取り組み、活動に見通しをもったり、振り返ったりしてよりよく学習する子」の育成を目指して、総合的な学習の時間の指導法改善に積極的に取り組んでいます。

まず、学習カード等の工夫や子供の実態に応じた支援計画を作成したり、一人一人の子供が見通しをもって意欲的に課題解決に取り組んで、自分を振り返ることができるような様々な支援を工夫して実践しています。

また、学習室や廊下の掲示物等を工夫して、子供自身が見通しをもって意欲的に調べられるように学習環境の整備に努めています。

一方、主体的に問題を解決するために、尋ねる力や話し合う力など、多様な「問題解決力」を洗い出し国語科を中心に各教科と関連づけて、具体的な場で計画的に育成しようとしています。

さらに、コンピュータやデジタルカメラ等を活用した問題解決的な学習活動も効果的であるため、情報モラルに留意しながら学年の発達段階に応じた「情報活用力」を系統的に育成しようとしています。

今後においても、総合的な学習の時間の趣旨を生かし、子供たちが自ら学び自ら考え意欲的に学習活動に取り組み、「生きる力」の育成が図れることを期待いたします。